

第 12 回高等学校改革プラン推進委員会（第二推進委員会）議事録

- 1 日時 平成 17 年 11 月 27 日（日）午後 1 時 30 分～午後 4 時 30 分
- 2 場所 佐久市研修センター 大会議室
- 3 出席委員

飯島 俊勝委員長	荻原 拓次委員
佐藤 元太郎副委員長	宮阪 義彦委員
芹澤 勤委員	滝澤 清登委員
遠山 順孝委員	中沢 裕委員
小林 將喜委員	西村 廣一委員
太田 節委員	市川 久由委員
和泉 碩也委員	原 貞次郎委員

4 開会

（植松主任教育支援主事）

それでは、お時間となりましたので。本日はお忙しい中を、お運びいただきましてありがとうございます。それでは委員長よりよろしくお願いいたします。

（飯島委員長）

皆さん、こんにちは。今日もお忙しい中参加いただきまして、ありがとうございます。ただ今から、第 12 回の第二推の高等学校改革プラン推進委員会を開催させていただきます。芹澤委員は公務のため、少し遅れてくるということでもあります。時間になりましたので始めさせていただきます。

それでは、本日の推進委員会の次第に沿って進めさせていただきます。

初めに、資料説明とございます。今日は、前回遠山委員から資料の要求がありました太田市と佐久市人口状況についての件であります。事務局のほうから説明をお願いいたします。

5 資料説明

（植松主任教育支援主事）

それでは、よろしくお願いいたします。

資料説明の前に、他地区の推進委員会の状況につきまして、簡単にご説明をさせていただきたいと思います。前回、11 月 13 日以降の状況でございますが、11 月 20 日（日曜日）に第四推進委員会において第 12 回の会を開いております。こちらでは第 12 区大北地区、大町、北安曇地区の個別論議、第 2 回目ということで行っていることでございます。委員長作成の資料、第 4 通学区学級数推移と少数決定数などの関係等を元に、学校数を 4 校から 3 校にする、大北地域の再編についての審議を、行ったということでございます。賛成意見が多く出されたところでございますが、次回以降も引き続き審議をするということでございます。

また、白馬高校の将来像について、その魅力づくりも含め、さまざまな角度から審議を

行ったということでございます。次回も引き続きまして、さらに第12区の論議を深めるということでございます。以上が第4通学区の推進委員会ということでございました。

続きまして、11月23日（水曜日）でございますが、南信地区、第三推進委員会で、第11回の推進委員会が開催されております。こちらでは、第7区、第8区、第9区で、各1校で全日制の校数減とすることにつきまして、個別に検討したことについて、それぞれの地区の委員の方から報告がなされ、それについての審議を行ったということでございます。また、次回以降も引き続きまして、総合学科高校、多部制・単位制高校の対比を、含めた再編成等につきまして、検討していく状況ということでございます。

以上、簡単ではございますが、他地区の状況についてご説明させていただきました。

以下、高校教育課植松主任教育支援主事から資料説明 【説明内容省略】

6 議事

（飯島委員長）

ありがとうございました。

それでは、資料についてだけのご質問等ございましたらお出してください。よろしいでしょうか。もし追って、ご質問がありましたら、また審議の中でご質問ください。

本日の議事に入っていきたいと思います。議事に入ります前に、前回、第2通学区に対する対案の高校に関しまして、委員長として、誤解を招くような、やや不適切な発言があったと、というようなご意見があちらこちらから出ておりました。これにつきましては、誤解につきましては、そのことについては撤回をして、いきたいと思っております。そういうことでご了解をいただきたいと思います。

本日、第二推進委員会として、地域から募集しました対案について、資料として前回、推進委員会の皆さんにお配りしたわけです。これについてどのような取り扱いをするのか、前回の委員会の最後で皆さんのご意見をいただきました。委員長、副委員長に一任するというので、前回の委員会を終わらせていただきました。委員会終了後直ちに、副委員長と共に、内容について十分検討させていただきました。この中で、一番大事なところは、第一推進委員会、いわゆる北信での地域からの提案募集に関しましては、当初からこの委員会において発表を、条件として募集をしております。しかも、おおむね15分程度という注意書きまでついております。

これに伴って、第一推進委員会では、発表を受けて委員会討議、運営がなされたと思います。私たち、第二推進委員会におきましては、皆さんご案内のようにホームページで、それぞれに地域からの提案という形で募集をさせていただいて、3つの対案が出されたわけでありまして、それにつきまして、私たち第二推進委員会では、「審議の参考とさせていただく」という形になっております。発表を条件としておりません。審議の参考にするということでありまして。この中で、対案として出されたものを佐藤副委員長と内容を検討した結果、今日はその中の、2つの対案についてご意見を伺うということで、それぞれの団体をお願いしてございます。その団体「望月高等学校存続と発展を図る実行委員会」ならびに「野沢南高等学校定時制を守り発展させる会」、この2団体をお願いしてございます。つまり、それは前回配られた資料の順番に沿って、それぞれの団体から対案についてのご説

明をお願いしたいと思います。

まず、初めに「望月高等学校存続と発展を図る実行委員会」の代表の方から、対案のご説明をお願いいたします。

（原 委員）

いいですか。

前回対案の取り扱いについて、今お話のように、正副委員長さんで検討すると、こういうことになりました。今、検討結果のお話があったようですが、対案を募集するということは、第10回、10月28日の委員会の最後の段階で、この場で、確認されたわけです。その対案を募集することについて、日程もこの委員会では確認されませんでした。これも後日という話です。そして、対案の取り扱いについても、この委員会では、諮られておりませんでした。そのことを事実として確認をしておきたいと思います。

そういう中で、今お話のように、そして前回の経過のように、地域から5本の意見が出された。これはやはり、前回も申し上げましたが、特別な取り扱い上の違いを設けるのではなくて、幸いといったら失礼ですが、それほど本数が多いわけでもありませんし、いずれもよく見れば本当に真剣な内容であるというふうに思います。ぜひ同じような取り扱いをしていただけるように、冒頭の議事の進め方について、異議を申し上げたいと思います。

（飯島委員長）

原委員から、ご覧のようなご意見が出されました。たぶんこの対案の募集をするときに、議事録がまだ出ておりませんからわかりませんが、対案を募集する要項についても、委員長に一任をいただいていたと記憶はしております。記憶だけですからわかりません。また、議事録を見ていただきたいと思います。

それは別といたしまして、この件につきまして、委員の皆さんからどうぞご意見をください。

（和泉委員）

私の理解では、南高については当初の時点では、当事者という話ではなくて、後で出た問題ですから、その高校の主体である運営の話は、やっぱり聞いてもいいのではないかと思います。それから、その上において、当初出発のときには、「どこを」という形ではなくて、具体的に決まっていなかったの、それで今、手を挙げられたところは、私は聞いてもいいのではないかなと、委員長の案に賛成です。

ただ、ほかの所は、県の議会や教育委員会、それから教育行政においては、それぞれの中で討議を尽くされて、一定の方向性の中でいわれたので、それをまたこの場で、やるということはちょっと私は理解できないです。ただ、この学校の当事者については、最初の時点で校名も出ていませんし、それだけは、やりたいというところについては、聞いていませので、それは、私は意見としてお伺いしてもいいのではないかなと思っています。

(飯島委員長)

ほかに、どうでしょうか。

前回、太田委員も、そのような、今の和泉委員と同じような意見を述べて、われわれはこの学校改革のそういう意見に対して、付託をされているのだと。ですから判断はこの委員会です、そのための意見を「必要ならば」という形で聞くというのがいいのではないかと、いう発言をしております。今日は欠席ですからあえて、前回の太田委員の発言を、提示させていただきましたが、委員長・副委員長に一任ということでもありました。

また、内容も読ませていただきました。今まで審議してきた内容と重複していることが、だいぶ多いようにも感じておりますし、それから最終報告の中にも、記載されている内容でもありますから、十分委員の皆さんはそれらの対案、いわゆる第三、第四の対案については十分ご理解の上、この後、審議をしていただければ十分ではないかな、というふうに思っております。冒頭申し上げましたように、望月高校、野沢南高校、略して呼ばせていただきますけれども、こちらのほうからの対案の発表で、進めさせていただきますがよろしいでしょうか。

(原 委員)

もう1回、失礼します。

もっと単純に受け止めていただきたいと思います。流れは、再編案がある、それに対していろいろな意見が出る。こういうことであります。内容を精査して、これが「どうのこうの」というやり方はやはりいけないかな、これはもちろんいかがかなというふうに思います。

今、問われているのは、この委員会がどういう結論を出すかということが、最も多くの関心と呼んでいるところでありますが、同時に、この第2通学区、上田、佐久地域の高校配置をどうするのか、その高校の具体的な形をどうするのか、これは大変な関心と呼んでいるわけでありまして、そのことについて、さまざまな地域の意見、これを聞く会がこの当会であったわけです。地域の意見を聞く、つまり、この委員会が開かれるということであるというふうに、私は、言い換えて理解をしたいと思うのです。

委員会は、どうしてもある種の限界があって、十分な意見を聞く、そういうことがなされないまま、きているような印象を持っています。あらためて、その地域の意見を聞くという、その点で、出された意見を公平に扱っていただきたいと、いうことを再度申し上げたいと思います。

こういう取り扱いというのは、非常に、委員長もおっしゃっているような形でやっていくことは、大変残念なことで、この委員会に大きな瑕疵(かし)というふうに私は思えてなりません。

古い時代の言葉で恐縮ですが、かつて今日の民主主義の考え方が歴史的に形成されてくる中で、非常に大きな役割を果たしたフランスに、ボルテールという思想家がいますが、彼はこのように言っています。「私は、あなたの言う意見にはひとつも賛成できない。しかし、あなたがそれを言う権利は、あるいはそれを言う自由は、私は命を懸けても守る」こういうふうに言ったのです。これが歴史的にフランスの革命やアメリカの独立に、大変大きな影響を与えたことを、縷々申し上げる必要もないと思いますが、問題はそういうさま

ざまな意見を、そして異なる意見などを聞くそういう民主主義、そして、寛容の問題だと思うのです。ご再考をお願いします。

（飯島委員長）

はい。ほかの委員の皆さんご意見をどうぞ。

（佐藤副委員長）

佐藤でございます。前回、この提案の取り扱いについては、最終的には、議長である委員長が取り上げればよいという話をしたわけです。それで私が、委員長だけでは、荷が重いでしょうから私も加わって、どういう取り扱いをするかというようなことについて、検討させていただきたいということで、この委員会です承されたわけでございます。

その後、委員長と私でいろいろ考えてみました。もちろん内容も読んでみました。そういう中で、そもそも、この提案を募集するときの要項の中では、第1通学区で募集した内容とは、違った内容で募集しております。それがひとつ。それから、この1から、たまたま5まであるわけですが、内容を読んでみますと、ほとんどこの1、2と重複しているのです。ですから、おそらく1、2で聞いていけば、その他の提案に対しては、各委員ももちろんこの提案の資料を全部お持ちですから、当然その資料の中で理解しながら進んでいくのではないかとということで、1と2を取り上げましょうと、こういうことで結論を出したわけでございます。

たまたま提案が、今回だけ1から5と、比較的少ない数ではございますけれども、これはあるいはもっと多くなる可能性も、当然あったわけでございます。そういう中で、テーマはだいたい同じですから、かなり重複している部分が多いのです。そういう中で、やはり1、2を委員会で説明していただければ、後の、少なくとも3、4に関しては、ほとんど理解できるのではないかと、審議の参考になるのではないかとということで1、2を議題にあげましょう。後は、議長が提案権があるわけですから、提案すればいいというふうに、結論を出したわけでございます。私は、議長が最終的にこういう形で提案しますと、いうことがあるとすれば、議長の提案に従って議事を進行するべきだと思います。以上です。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

今、副委員長である佐藤委員から、私の説明不足を補っていただきました。この審議を進める中において、第3、第4の提案あるいは第5の提案の中で、私たち委員が十分理解できないところに関しましては、また、説明をお願いするということもあり得ると思うのです。

取りあえず今日は、第1、第2の提案、略称で申します。望月高校と野沢南高校の対案の発表をお願いしたいと思います。よろしく願いしたいと思います。

それでは、初めに望月高校の代表の方、説明をお願いいたします。どうぞ、お座りになって説明をお願いします。あえて時間の掲示等はいりませんが、おおむね10分ということで、よろしくどうぞお願いします。

(望月高校存続と発展を図る会：上野)

ただ今、ご紹介をいただきました「望月高校存続と発展を図る会」ならびに同窓会の会長でございます。上野でございます。よろしくお願いいたします。

高校改革プランおよび再編整備候補案検討について、献身的なご尽力をいただいております、第二推進委員会各位に敬意を表するとともに、対案を受理し、本日説明の機会を与えていただいたことに、心より感謝を申し上げる次第でございます。多部制・単位制は時代の変化による不登校経験者などの再挑戦、向学心育成、ニート、フリーター等の予防など、緊急避難的な意味合いを持つ学校であり、早急に開校する必要があると思います。

平成15年6月に出されました報告書、「長野県にふさわしい多部制・単位制高校について」の、長野県にふさわしいとは、自然環境、都市部の雑踏を離れた閑静な町、歴史の町、素朴な文化などの心の癒やしを、重視する精神と解釈できます。他県平野部の鉄道の発達した都市部を、モデルにした交通の利便性は望むべくもありません。それが長野県であります。従ってバスや自動車、バイクでの通学を考慮すれば、通学距離、時間、道路網などから考えて、望月高校は長野県にふさわしい多部制・単位制高校となります。これが、望月高等学校存続と発展を図る実行委員会の総意でございます。80年の歴史の中で望月高校は地域の文化の中心でもある、なくてはならない学校でありますことを付け加えておきたいと思います。

県、および推進委員の皆さま方のご推薦をいただくなれば、地域はもとより、あらゆる組織をあげてご協力することをお誓い申し上げ、私の説明を終わります。

なお、望月高校における詳しい多部制・単位制については、実行委員会の常任理事および、望月広域教育プラットフォーム幹事長でもある荻原昌幸より、ご説明をいただきますのでよろしくお願いいたします。以上で私のお願いを終わらせていただきます。ありがとうございました。

(飯島委員長)

ありがとうございました。それでは、引き続いて荻原さん、お願いいたします。

(望月高校存続と発展を図る会：荻原)

荻原昌幸でございますが、どうぞよろしくお願いいたします。

望月高校は、長野県にふさわしい多部制・単位制高校となり得るということを6つの点から、これからご説明申し上げたいと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

まず、最初に、平成15年度の6月に出された、「長野県にふさわしい多部制・単位制高校について」の報告書から申し上げたいと思いますが、これから先は「報告書」ということで、述べさせていただきますが、どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど、会長から申しましたように、長野県にふさわしいということは、心の癒やしを重視する精神であると、そのように考えるならば、私たちの望月地域は純粋な農村地域であり、空気や水がきれいなことはもちろんであります、歴史や素朴な文化が存在して、人々の心も純朴であります。子どもたちの心を癒やすには、最適な環境であるのではないかと考えるのがまず1点目の側面であります。

2つ目は、不登校、中途退学者等へのニーズ対応ということでございますが、「報告書」

によりますと、昼間の定時制への入学動機は、高校卒業資格の取得もさることながら、生活をやり直して成長したい、そういった強いニーズがあると記されておりますが、私どもの中学校における不登校の状況は、大変深刻でございます。この子どもたちは、高校入学というそういう節目に内側から変わろうとしていると、このように私たちはとらえているわけでございますが、また、高校を中退して再度入学を希望する子どもたちも思いは同じではないかと、とらえております。

望月高校では、現在、中学校の不登校経験者を3割近く受け入れて、多くの子どもたちを卒業させております。また、中学校で不登校だった子どもが、生徒会長をやったり、国立大学の受験に挑戦するなど、生活をやり直し成長した姿が見られます。多部制・単位制高校は、現在、望月高校に入学している子どもたちが共に、また希望してくださるだろうということを、推測しているわけではありますが、こういった不登校等を経験した子どもたちに対する指導実績を持っている、望月高校は多部制・単位制高校として最適ではないかと考えております。

3つ目、生涯学習社会への対応ということでございますが、やはり、報告書の中では、生涯学習社会に対応した新たな高校教育というのを、ニーズを開拓していくことが重要であると述べられているわけではありますが、望月高校は、現在に先駆けてオープン授業を実施し、本年度も50名を超す地域住民の皆さんが、高校の授業を受けております。私も週に2回でございますが、高校の地理の授業を受けさせていただいて、子どもたちと一緒に勉強させていただいております。

地域におけるリカレント教育のニーズをすでに受け入れて、地域に開かれた学校として生涯学習社会への対応を、先取りして実施していると考えております。望月高校は生涯学習社会への対応の面でも実績がある学校といえるのではないかなと考えております。

4つ目でございますが、こういった皆さんを、受け入れる上での履修形態でございますが、午前の部と午後の部との二部制を考えております。これらの子どもたちを受け入れるためには、午前、午後の定時制課程をさらに3つに分けて、大学への進学、向学心の育成、生涯教育受講者の受け入れなどを、行っていきたいと考えております。入学を予想される子どもたちは、自律的な生活が、なかなかできにくい状況であるのではないかなと、推測するわけではありますが、従って社会性を身につけるためにも、十分な支援をしていかなければいけないと考えております。

そのために、広い意味での管理をしていく必要があるのではないかと思いますので、ほかの県でのフレキシブル・スクール的な運営では、中退者も多く好ましいとは言えず、そこで、望月高校の多部制・単位制においては、ホームルームを軸にして、授業を学ぶこと、人間としての育ちにも取り組み子どもたちのニーズにも応えていきたいと考えております。単位制高校であっても、同じクラスで一緒に進級し、単位不足の者は、4年または5年で卒業すると。それから高等学校卒業程度認定試験、旧大検であります。合格科目の単位認定も卒業単位に補充していく。できれば3修制、3年間で卒業するような、そういう履修形態を取っていきたいと考えております。

5つ目でございますが、学校を変える仕組みをつくって、地域では、望月高校を支えていきたいと思っております。委員の皆さんのお手元にありますでしょうか。「望月教育プラットフォームだより」というのがございますが、このプラットフォームで支えていきたいという事

でございます。やはり報告書の中で、地域社会との連携と融合の育成を願っていると、そういう面で行きますと、望月地域では、望月教育プラットホームを立ち上げて、学校と連携、融合について、すでに具体的に活動を始めております。

プラットホームの考え方は、高校改革プランの検討委員会で委員長の、葉養正明東京学芸大学教授の提案でもございます。望月教育プラットホームでは、学校を中心として、子どもの先生、親、地域の皆さんが、成長する仕組みとして学びの共同体を立ち上げました。

学校では、授業改革および教員の資質の向上の取り組みを行い、授業が変わると、学校が変わり、子どもが育つことを願い、取り組んでいます。望月高校でも、授業が核、命と考えて授業研究会を行い、全ての子どもが参加することを願っています。来月ですが、12月3日には、東京大学の佐藤学先生をお招きして、望月高校で公開授業研究会を開催いたします。人間形成にとって、旬の時期に一生懸命支援をしていきたいと考えております。

6つ目でございますが、交通の便利性的問題でございますが、先ほど会長が申しましたように、長野県の私どもは交通が不便な地域であると考えております。従って通学のためには、やはり自動車での送迎とかバイクでの通学は当たり前であると、そんなふうにとらえているわけでございます。

望月高校では、現在、上小や佐久などの広い地域から通学しております。また、地理的に見ても、第2通学区の扇の要の位置にあるのではないかと考えているわけであります。上小、小諸、佐久方面からの道路網が整備され、バスの便もあり通学には支障ないと考えております。

長野県にふさわしいと考えたとき、私たちは、利便性ではなく、教育の質を最重点に改革していくべきだと考えております。多部制・単位制高校は、時代のひずみにより必要になった緊急避難的な発想であり、第2通学区の生徒数から考えても、3学級程度に押さえるのが、よいのではないかと考えております。以上のような点から、望月高等学校は多部制・単位制高校として最適な高校であると、このように考えておりますので、委員の皆さんのご検討をよろしくお願いいたします。以上でございます。ありがとうございました。

（飯島委員長）

ありがとうございました。上野会長さん、また荻原常任理事さんありがとうございました。今、対案の説明がございましたが、もしご質問があれば、そんなに長い時間はとれませんけれども、委員の皆さんどうぞお出してください。

（中沢委員）

説明ありがとうございました。具体的で、わかりやすかったのですが、二点お聞きします。ひとつは、前に提案書が送られましたが、そこに山村留学計画も受け入れた、そういう項目があるのですけれども、具体的に何かこういうことをイメージされているとか、そういったグループ、団体があるとか、その辺がありましたら教えてください。

もうひとつ、望月は今度、佐久市に合併しましたね。そこで佐久市そのものとしては、この受け入れに対して、提案に対してどのようにお考えなのか、少しわかったら教えてください。以上です。

(望月高校存続と発展を図る会：荻原)

それでは、2点ご質問いただきましたので、お答えできる範囲でお答えさせていただきますが、よろしくお願いいたします。

まず、山村留学についてでございますが、私ども、今申し上げました教育プラットフォームの中でそういったことをお引き受けしたいと考えております。例えば、こちらで宿泊施設等もプラットフォームとして対処していきたいと考えておりますが、まだ具体的にプラットフォームも立ち上がったばかりでございますので、「このような方法で」ということは考えておりませんが、対処していきたいと思っております。

2つ目の、佐久市としてはこのことについてどうか、ということについてでございますが、基本的には、佐久市では野沢南高校の問題、それから望月高校の問題がございますが、それぞれの学校の地元で、まず取り組みをしてほしいと、その上で、また佐久市も対処していきたいと私どもはご意見を伺っております。

従って、望月高校といたしましても、望月高校の地域として、多部制・単位制高校を作りたいと、そんなふうな願いを持っているわけでありまして、以上でございます。

(飯島委員長)

ありがとうございました。ほかにいかがですか。

(小林委員)

小林です。よろしくお願いいたします。

多部制・単位制について、議論の中心になっておりましたのは、県教委で出された午前の部、午後の部、夜間の部ということで、今までどういうふうにしようかというようなことの検討途中でございます。そういうことで、午前の部、午後の部の二部制が望ましいというふうに、前回の提案書にございます。

従って、三部制ということについては、何かお考えがあるのかどうか。もし、お考えがあれば、望月は二部で、夜間の部は現在のところでもいいよとか、あるいは「こんなふうだ」というようなお考えがあれば、ご説明いただければありがたいと思っております。

(望月高校存続と発展を図る会：荻原)

今、三部制ということでございましたが、すでに申し上げてある通り、午前と午後の部、それをまた三つに分けて実施していきたいと考えているわけでありまして。夜間の部を設けなかった理由でございますが、ひとつ目は報告書の中に、夜間の部に対するニーズが非常に少ないと、ということが1点であります。

それから、2点目は経済的な理由でございます。まず、夜間の部を行うということになると、給食施設、グラウンドの照明等、そういった施設が必要になるわけでございますが、昼間だけであれば、それは必要がなくなると。それから、2つ目は、職員の配置等に関する問題でございますが、例えば、松本筑摩高校等では、校長先生はお一人ですが、教頭先生が部ごとに4名いるとか、そういったことがあるわけですが、昼間の部であれば、それは必要ないであろうということで、私どもは、夜間の部は基本的に行わないで、昼間だけで行いたいとそのように考えました。以上でございます。

(飯島委員長)

はい。ほかによろしいでしょうか。

(荻原委員)

大変、いいづらいことをご質問いたしますが、県の再編整備計画案では、望月高校と蓼科高校の統合となっておりますが、このたたき台について、対案という形で多部制・単位制高校の提案を出されてきました。このたたき台に関して率直なご意見を聞かせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

(望月高校存続と発展を図る会：荻原)

今、県の案に対して、私どもが多部制・単位制を提案したことについての経過等を含めてということでございましょうか。よろしいでしょうか。

私ども、最初、県から案が出されたときに、その前の段階の高校教育改革プランの、先ほど申しあげました葉養先生が、委員長でやっておられるときの案が出た時点では、私どもは、ひとつは6学級1学年をなければ非常に難しいということと、その時点で、私どもは、人数の面ではとても望月の地域では、子どもが入学してくれることはできないだろうと思っておりました。

もうひとつの案として、そこに載せられておったのは、学校として特色を出して、地域としてなくてはならない高校であるならば、それは残してくださるということが、その案の中の最終報告にあったわけですが、そういう面で、私ども地域として特色を出そうということで、ここに差しあげました望月教育プラットホームを立ち上げて、地域の高校と、また地域と一緒に、子どもの育ちを願っていこうということを考えたわけですが、発表された蓼科高校と望月高校を一緒にしてひとつの高校にするという案を見たときに、私どもの願いが実現できそうもないということで、私どもいろいろな観点から検討いたしました。現状で望月高校を存続させていただくことは厳しいのではないかなと判断し、そうであるならば、地域も願っているプラットホームで支えをしながら、いろいろな、多様な子どもさんを受け入れて、その子どもたちの育ちを願っていくことがいいのではないかとということで、私ども、県の案は全く違ってはいないのですが、多部制・単位制高校ということで、提案をさせていただきました。以上でございます。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございます。ほかにも、よろしいでしょうか。

(西村委員)

長野県には、いろいろな高校があるのでございますが、他校に先駆けて、こういった教育プラットホームを、導入してやっていらっしゃることは、素晴らしい高校を作っているということの現われと思っております。私自身も見習わなければいけない点がいっぱいありますので、そうしていきたいと思っております。さて、ずっと前回から心に引っ掛かっていることがございまして、先ほどもお話があったのですが、「長野県らしい多部制・単位制」とは何だろう、それが私には、どうしても引っ掛かっているのです。

自然豊かな、それから心を癒やす地域、それが望月であるというふうにおっしゃいました。私もそうであると思います。でも望月だけなのか。自然豊で、心豊かに暮らせるのは、望月だけではないのではないかと、いっぱいあるのではないかと、そんな感じがしております。まだまだ、まとまっていないのですけれども、「長野県らしい」というのを、どう考えるのか、難しいところです。すみません。感想だけで申し訳ないです。

（飯島委員長）

はい。ありがとうございます。答えはよろしいかなと思います。ほかの委員さん、どうでしょうか。はい。ありがとうございました。上野会長、また荻原さん時間を取っていただきまして、ありがとうございました。それでは望月高校からの対案の発表を終わりたいします。ありがとうございました。

（望月高校存続と発展を図る会：上野、荻原）

どうも、ありがとうございました。

（飯島委員長）

それでは、続きまして「野沢南高等学校全日制・定時制を守り発展させる会」の代表の方、対案の説明をお願いいたします。どうぞお座りください。

（野沢南高等学校全日制・定時制を守り発展させる会：岩岡）

「野沢南高等学校全日制・定時制を守り発展させる会」の会長をいたしております、南校の同窓会の会長の岩岡でございます。よろしくお願いいたします。今日、このような機会を与えてくださったことに心より感謝申し上げます。

さて、6月24日に初めて多部制・単位制という言葉を知りました。県ではすでに何年も検討されたことであっても、一般の私どもには耳慣れない言葉でした。まして野沢南高校が遡上に上げられ、驚愕の一語でした。それで、この制度のメリット、デメリットを私どもなりに調べ、また、松本筑摩高校にいらしたところのある先生から、そのマイナス点も伺いました。その結果、私どもが願うことは、もう一度白紙に戻して、各校のさまざまなデータを元に、シャッフルし直していただきたいということです。

近ごろの少年、少女の自己本位的なところを見ますと、自分の好きな科目を取っていくということが、そういう自己本位的なところを、助長することがないかというような心配もございます。でもこの前、推進委員長さんのおっしゃるような白紙に戻せないのでしたら、次善の策としては、第一に考えられますのは、全通学区ではなく、長野、松本のような大きい都市で実施し、その成果を見て全県に広げてほしいのです。必ず、全県一斉にという至上命令は拙速ではないでしょうか。

次に考えますのは、小海線より通学の利便性がある、しなの鉄道沿線にしてほしいということです。最後に、もしどうしても小海線沿線でなくてはならないのでしたら、推進委員の皆さんに実際に小海線に乗り、各校に駅から歩いて実地検証をしていただきたいのです。私の申し上げることは以上ですが、後は、学校をより密接にご存じのPTA会長が説明をいたします。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございます。どうぞ、続いて。

(野沢南高等学校全日制・定時制を守り発展させる会：井出)

P T A会長の、井出亮と申しますがよろしくお願ひしたいと思います。今回の改革プランの具体的な実現に向けましては、それぞれの地域において、本来でありますとともにみなで高校を取り巻く問題、課題を明らかにし、どんな高校をつくっていくのか、大いに議論をする中で、進めていただくことが基本であると考えております。

しかしながら、先ほどのたたき台の公表によりまして、現実的には名前が挙がった高校、挙がらなかった高校、これが区分されまして、校名のみ注目され、地域全体で、本来の魅力ある高校づくりについての議論が、されにくい状況になっているのが事実でございます。そういった状況の中で、私どもつぎのようなご対応をいただけるよう、お願ひをしたいわけでございます。

1 点目では、推進委員会における協議についてでございますが、魅力ある高校づくりについての進め方につきまして、やはり各地域、いろいろな方々に集まっていただきながら、高校のあり方について考える、そういう機会をぜひ設けていただきたいと思います。このことにつきましては、この改革プランの委員会の検討委員会の最終報告、この「はじめに」の部分にもございますが、葉養委員長さんが、この中で3点ほど述べられております。

ひとつは、今後、具体的にどのように対応するか検討するには、それぞれの地域で衆智を寄せ集める必要があるということ。それから、高校再編の具体像の審議は、基本的には地域にゆだねるのだと。また、各地域で高校の未来像に向けた話し合いが、持たれることを願っているということ、初めの部分でおっしゃっておられます。その具体的な取り組みにつきまして、私どもはお願ひをするものでございます。

また、多部制・単位制の設置についてでございますが、どういう多部制・単位制の高校を求めていくのか、また、どのくらいの需要を見込んでいるのか、これが実態が全く見えてまいりません。この需要が現在不透明な中、単に南校を転換するということになりますと、現在240名の子どもたちの学びの場を、取り上げることになるわけでございます。地域の中で、何が問題であるのか、その中で多部制・単位制の設置が必要なのかどうか、その上で、設置を決定していただき、その上で、白紙の状態、どこに設置をするか検討をしていただけるよう、お願ひをするものでございます。

それから、適正配置についてでございますが、特に佐久地方2校削減ということありきの討議、たたき台でございます。ご案内の通り、佐久地域では11校ございますが、このうち地域校が4校、単科職業校が2校ございます。これが上田地方とは全く違う特性であるということでございます。この中で、普通科の2校削減するということになりますと、職業科と普通科の比率が大きく影響してまいります。今日、普通科志向が高まっている状況の中、非常に疑問視される状況ではないかと感じております。また、職業科、専門学科等のあり方を含む、幅広い視点から、ぜひご検討をお願いをしたいということでございます。

それから、学校の再編についてでございますが、子どもたちに直接影響するものでございます。県のたたき台では、14年後の、平成31年には10クラス減だと。従って2校削減を

すると。これが2年後の平成19年から実施するという事でございます。しかしながら平成19年で見ますと、生徒数は本年度と比べて89人しか減りません。2クラス減で良いのであります。また7年後の平成24年に至っては、生徒数は143名の減ですが3クラス程度。また12年後の平成29年に至っては、284名の生徒数減ですが、5から6クラスの減という形です。5校に1クラス減ですむ状況であるわけですが、この19年から毎年200名近い子どもたちの受け皿が、現実的にはないわけでありまして。これに対する具体的なケアが、全く見えていない中で、地域住民のコンセンサスを得るということには、当然いきなりと考えております。

また、これから具体的な多部制・単位制の設置につきましては、野沢南高については、先ほど同窓会長が申し上げましたとおり、通学環境は非常に不便であります。しかしながら、全日制普通科として、常に定員以上の志願者を集めておりまして、また、卒業者の多くが大学に進学していると。こういう状態から、これを上回るメリットがあるのかどうか、非常にわからない点でございます。

しかしながら、今後、検討する中で、不登校、また高校中退者、いろいろな価値観を持った子どもたちを、受け止めていく必要があると、その受け皿には多部制・単位制がいいという形になった場合には、全国的には、駅の近所につくっている場合が多いわけでございます。都市の中で、交通手段がよい方が適当ではないかなと感じているものでございます。今日、私どもPTAそれから、各保護者、子どもたち、いろいろな話を聞きますと、これからこの地域をどういう方向に進めていくのか、大変不安を感じているのが実態であります。

ぜひ、地域全体で考えていく手法をぜひお採りいただき、後世に悔いが残らないためにも慎重なご対応をお願い申し上げまして、提案のご説明にさせていただきたいと思っております。どうぞ、よろしくお願いいたします。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございました。

同じように、委員の皆さんからご質問があれば、お受けしたいと思います。発表をいただきました、岩岡会長、井出PTA会長に対してなにか質問ございますか。よろしいですか。

それでは、岩岡会長、井出会長、ありがとうございました。お時間をいただきましてありがとうございました。

ただいま、望月高等学校存続と発展を図る実行委員会、ならびに野沢南高等学校全日制・定時制を守り発展させる会、2団体からそれぞれ、お手元の資料に添ってのご説明をいただきました。

それでは、これらのご意見をいただいた上で、前回第2通学区は、多部制・単位制1校を、設置する方向で検討していこうと、ということで合意を得ております。それにつきまして、どのようにこれからしていっていいのか、これからは具体的な学校名も出てくるかもしれません。そのことを含めまして、ご意見をいただきたいと思います。また、2例の発表を念頭に入れる中で、議論を深めていっていただければと思いますけれども、まず初めに望月高校の関係に対しまして、何かご意見がありましたら、どうぞ。ご意見いただき

たいと思います。

（小林委員）

今、両校のご説明いただきまして、ありがとうございました。

今までたびたび申し上げてまいりましたが、「即どうするか」という議論にいく前に、多部制・単位制というものの、今もご意見の中にも、よく知らないとか、私もたびたびマイナス思考がある。どうも現在の定時制に通っている子どもを、1校に集めるのだというような、そういう感覚でとらえている。そうではなくて、全く新しい、子どもたちが、希望、夢を持って通ってくる、白馬から小諸へ通うというような、そういう魅力ある学校、それにはどうするか、県教委でも、なかなか明確な回答がいただけませんでした。

そういうことで、例えば望月高校が、夜間は特に今のところ考えていないというお話でしたけれども、われわれはそれをどうするかということも、考慮に入れて検討しなければいけない。その中で、夜間の生徒数が少なくなる。必要でないとはいわないけれども、軽く考えてとか、あるいはどうするのかという、そこまでは出ておりません。私たちは今後どうするのかということ、これから検討していかなければいけないと思います。

それから、夜間の交通と給食施設が必要になる、今高校を決定したときに、その設備というものをどれだけ保証してくれるのか、どれだけの援助をして、どのようにするのか、私たちがこういうことを付帯決議で、書いたとすれば、それがとおるのか、こういうことで2度ばかり話し合いをしてきたけれども、そういうご保障というものは、あるのかどうか、意見だけ言ったままで、あとは県にお願いしてとなるとすれば、ちょっと二の足を踏んでしまいます。「そんなところはまかせられない。」「いやだめだ。」と同窓会はじめ、地域の皆さんあげて反対するようになってくると思う。

そういうものではないと思う。今そういう感覚、あるいは感情でとらえられるとすれば、県教委のPR不足であるし、われわれも、いろいろな議論の進め方を、広めていかなければいけないということです。望月の、先ほどの説明でいくと職員数のことなどを、ひとつ一つ工夫してどうなるかということです。県教委では、総合学科については相当力をいれて、いろいろな面では、援助あるいは支援するように、考えていますけれども、多部制・単位制はどれもそこまで考えていない。もう少し、多部制・単位制について、魅力ある多部制・単位制とはどういうものかを検討し続けていかなければいけないと思います。

（飯島委員長）

はい。ありがとうございます。前回も、この第2通で、多部制・単位制を導入の方向で検討しようとしたときにも、多くの委員さんからはそのようなご意見が出ておりました。多部制・単位制学校を受け入れるにしても、十分な経済的支援があるのか、今お話のように加配の先生方は大丈夫かとか、それぞれたくさんの付帯決議をつけたらどうかというご意見が出てきております。それらは、当然実施いただけるという形で、進めてよろしいでしょうか。

(吉江高校教育課長)

今、小林委員さんのほうからご質問いただいた関係について、お答えいたします。

第一義的には、先ほど望月高校のほうから給食のお話が出まして、給食というのは水回りの問題等あります。それと、さらには効率のいい施設の使い方ということで考えた場合に、財源的には今現在、定時制等のあるところのほうで、好ましいという気持ちはもちろんあります。ただしかしながら、全体の中で決まってくる学校というようなものが、確定といえますか、それぞれの委員会において、ひとつの方向性が出れば、その施設の手の問題がありますが、若干その辺は不確定要素はございますが、必要な施設設備が、例えば給食設備の必要性があるということであれば、それにつきましては私ども、整備してまいりたいという前提で考えております。

それから、先生の加配とかいうふうなお話につきまして、これは単に、第二推進委員会の、このご当地に限らず、ほかのところにもそうですけれども、当然ながら、今までの全日制を転換するというような位置付けをしておきましても、従来の夜間定時制とそれから、昼間で午前部、午後部および夜間部の三部定時制ということになりますと、当然教員の数の問題も増やさなければいけませんし、また、必要に応じての人的な配慮も、当然必要なものは解決するということで考えておりますのでその点は、よろしくお願いします。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございます。十分考えているということであります。また、途中で不明な点がありましたらお出しください。どうでしょうか。

(和泉委員)

先ほど、望月高校のほうから午前と午後の話が出たのですが、夜間をどうするかということで、今こういうシステムを作る場合には、基本的にはニーズがあるかどうかという問題もあるのです。そうすると今度は当事者で運営する形が、よく見えない形になると思うのですが、最初の時点から申請というか意見が、午前と昼の形になっているというよりも、一応三部制の人たちの問題も救うという話、救うという言葉はちょっと語弊があるかもしれませんが、運用する形の募集をしていって、運営を回す形でいくのか、それとも最初から二つでいくのかということについては、たぶん、県も考え方があってと思いますが、今までの吉江課長の話だと、インフラについては、それなりに結論が出れば、それをサポートするような前向きな意見もあるので、二部制ではなく、三部制というシステムは残しておいたほうがいいと思っています。

(荻原委員)

多部制・単位制についての議論については、私のイメージでは、不登校、中途退学者の受け入れ高校の役割、あるいはまた、再挑戦して敗者復活といいますが、息を吹き返すことができる生徒、あるいは弱い子のケア保証といいますが、そういったセイフティーネット的な部分が多いというのが、私のイメージですが、実際には、これを例えば南高に、たたき台としてあるわけです。実際には、生徒の将来というのは、やはり高校の出口といえますか卒業時に、どうやって進路を考えていくかということになりますと、野沢南高の今

担っているこの地域でいえば、「中進学校」という部分があるわけですが、そういう「中進学校」の行く先が、先ほど同総会からお話ありましたように、どこへ実際受けられるのか、私は大変疑問なわけです。

例えば、ここに私立の長聖高校もございますし、そういった部分ではどの辺まで県教委は、考えているのかという疑問もございますし、かえって、多部制・単位制はこの中では、柔軟化の中では、進学対応型のも多部制・単位制という部分も選択肢の中には、あるわけですから、そういう意味では、セーフティーネットとしては、先ほど提案があったように、県庁所在地あるいは松本で、ある程度実績があがったところでやってもいいのではないかと思います。特に、この5通、6通ではである佐久関係の旧6通学区に集中的に改善の順番が必要だと。上田は大規模校で議論の必要がないということもあるのですが、そういうことでいえば、私が申したセーフティーネットとしての機能としては、もう少し長野、松本で実績を上げてもらいたいという気持ちが非常に強いわけです。

そういう意味では、出口の保証をしないところに、こういった提案が、県教委で出てくるというのは、なにか納得できないという部分があるわけですが、それについて県教委のスタンスを、教えていただければと思います。よろしくお願いします。

（飯島委員長）

ややまた、だいが前の委員会の内容に、戻っているような気がするのですが、県教委の具体案を、やはり求めたほうがよろしいでしょうか。

（吉江高校教育課長）

すみません。5通、6通のお話については、以前もお話申し上げたことでございますので、ちょっと省かせていただきますが、旧6通学区について申し上げますと、以前もお出しした資料にも出てまいりますように、今現在の51という募集学級数が、31年には41ということで、非常に減ってくると、というような実情の中で考えている次第であります。

それと、多部制・単位制について申し上げますと、以前も申し上げたことがございますが、確かに、松本とか長野で実施してからと、というようなお考えもございますが、私どもはひとつとしまして、長野県の広い県土を考えた場合に、今後の多部制・単位制を、それぞれの地区のそれぞれの中学を、卒業される方々に、ある程度これで1校ずつ出来たから、すべての皆さんが十分通えるエリアを、確保できたというような位置づけには、必ずしもならないとは思っておりますが、可能な限りの融通を利かせていただいての、通学可能範囲という趣旨から、1校ずつ設置していきたいというようなスタンスでご説明させていただきました。

その上で申し上げますと、まずは例えばこの旧第6通学区を、ひとつの例で上げた場合に、普通科の部分が、募集定員がある程度減ってくる場合に、これは周辺の学校によりまして、以前も申し上げましたように、それぞれの年度ごとに募集定員というのが変わってまいります。具体的に来年度も変動があるのです。来年度というのは、今はもう18年度が決まりましたので、19年度ということになりますけれども、19年度も当然ながら、生徒数の減少に伴って減ってくる。その減ってきた数字を全体に見直した上で、普通科が仮に今後減るということであれば、当然ながら先ほど、ご発言の中にもありましたように、

普通科の生徒さんが、行き場がないというような事態にならないように、全体のそれぞれの学校の中の定数改善の中で、必要に応じて増やすところは、増やしてまいりたいと考えております。

また、多部制・単位制につきまして、なかなかイメージがわからないというお話もございましたが、私どもは、多部制・単位制というのは、ある意味、位置づけは確かにフレックスな単位の設定ということになりますので、定時制というような位置づけにならざるを得ないというのは事実でございますけれども、しかしながら一方、ある程度以上、全日制の生徒さんも十分お入りいただいて、またそういうような生徒さんに、今後大きく門戸を開いて発展していく学校であろうと、というようなことは当然ながら考えております。

ですからまた、反面、それぞれの生徒さんのいろいろな要望等があるかと思っておりますので、その要望に応えるような意味での、単位制の利点を生かしての、いろいろな意味での、それぞれの科の講義のできるものの設定を十分してまいりたいと考えております。

（飯島委員長）

お答えが、前にいただいたのと同じ答えですから、先へ進みたいと思います。今日、望月さんと野沢南さんからそれぞれ対案をいただきました。いただいた以上、説明を聞きっぱなしというわけにはいきません。望月さんの対案をどうとらえ、私たちが受け入れていくか、その辺のところのご意見いただきたいと思います。それは、先ほど、小林委員からもございましたように、三部制、定時制のことも含めながら、どう考えていったらいいか。いかがでしょうか。

（市川委員）

お願いします。

今回の件に関しましてはふたつの観点から私はとらえております。まずは生徒側の立場からいきまして、今後の高校の改革を、大きくシステム的に変えることによって、高校の魅力を再度考えさせること。これが個人のレベルで成り立つ、単位制というものに特に注目させていただいて、それが総合学科と多部制・単位制とそういう点に顕著に表れているかと思えます。そのほか、システム的に変えるところにつきましては、さまざまな提案がされて e-Learning、中高連携、ネットワーク化、あるいは中高一貫など出ておりますが、単位制につきましては、非常に魅力的なものを掲示する可能性、今後の進学型に、対応するメリットがあるということで、たくさん考えると、多様化に対応出来る。これはもう、繰り返しここで議論されて、認められていることだと思います。これに関しまして、望月の地域の方々の提案につきまして、これを、非常に肯定的にとらえていただいて、強いご支持の意見をいただいていることに関しましては、この委員会の趣旨とたがわないものだと思います。この点につきまして、非常に感謝申し上げて、この提案につきまして、望月の関係の皆さんにご意見いただいたことに、非常にさらに、この思いを強くした点がございます。

もう1点ですが、これから私たちが、実際には、統廃合の問題について考えるより、魅力ある高校を考えなければならない。もう1点のこの点について、十分な点が、本来なら平成元年に、出されていなければならなかった。それが、20年近く放置されて現在、この

ような事態になっていって、さらに今後 10 年後には、今、対応しておかなければ、ノウハウを培っておかないと、その 10 年後に本当に子どもがいなくなってくる兆候がみられたときに、どう対応するということが、できなくなってくると思うわけです。

それに関しまして、定時制に関しての統廃合につきましては、さらに十分に早めに対応していく必要があるかなと私は思います。その点につきまして、望月のご提案で支持させていただいて、非常にありがたい点があるわけなのですが、今度は鉄道の問題、鉄道沿線、ここに十分な配慮をする必要な点につきましては、これに代わるもの、鉄道沿線でない、このデメリットを打ち消すような特別な配慮、強い行政の面からのサポートが必要になるかなと、いうふうに思っております。この点を、考慮させていただければ、定時制に関しましては、これまで蓄えられました先生方の、ノウハウの問題が集約されて、地域の中心的な、生涯教育コミュニティも含めた生涯教育センターとしての役割も含む、成果のあがる単位制の高等学校ができあがるのではないかと思います。この裏付けが、行政的になされないかぎり、やはり、鉄道優先の学校に、目を向けざるを得ないのではないかというふうに私は思っております。以上です。

（原 委員）

およそ 2 点について申し上げたいと思うのですが、これから申し上げることは今までも、1 回ならず発言をしていることでありますが、ぜひその点をあらためて確認をしていたきたいと、いうことで申し上げたいと思っています。

今、市川委員からも発言があったものですが、その単位制が、ある生徒にとっては魅力的であると、いうそのこと自体については否定するものではありません。ただし、単位制が、前回こういう言い方をしました。「単位制のみで運営する」、これが提案されている内容なのです。それにさまざまな工夫を加えることはできるわけです。

単位制のみで運営される場合に、いろいろな問題点がすでに考えられ、そして、現実展開されている静岡の例であるとか他県の例を見ても、例えば自己責任で学ぶが故に、途中で切れてしまう。ドロップアウトするという数が多いし、比率も非常に高いという、こういう問題等もあるわけです。

それで、先ほど、望月から丁寧な対案の説明がありましたが、そのご説明の中で、私が注目したのは履修形態の問題で、二部制にすると同時にさらに学校運営の中身においては、ホームルームを軸にというご発言があったと思います。そうすると、これはいわば想定されている、多部制・単位制の高校は、先ほどからいっているように、単位制のみの運営であったわけですが、そこに、学級とか学年とかいう考え方を取り込んでいるわけです。そのところが、望月提案のいわば、長野県にふさわしいという、そういうところの長野県らしいといいますが、裁量権を大いに使ったのご提案ではないかというふうに思うのです。単位制のみが抱え込む問題点を、どう事前に克服するかということを、念頭においているのではないかというふうに感じました。

それから 2 つ目の問題ですが、これもこの委員会が発足してまもなくから、再三再四申し上げてきたことで、今回もまたいわなければいけませんけれども、今日の夜間定時制が担っている役割、これをあらためて、ご認識いただきたいと思うのです。

大きな集団では対応できない子どもが非常に多いのです。もちろん、現在、定時制にき

ている子どもで、大きな集団に入っていける子どももいます。しかし、より多くは小集団の中で、じっくり、ゆったり学んでいく。そういうことが必要なのです。

それから通学圏域も、できるだけ近い、自宅から近い定時制に通って学ぶ。このことが、欠かすことができない条件なのです。ですから、多部制・単位制という新しいタイプの高校をつくる、そういう高校に属する高校生も当然いるでしょうが、現在のこの第2通学区には、今4校定時制がありますけれども、その定時制をなくして多部制にもっていく必然性はない。これは何度か申し上げてきて、そういうご確認がされてきている。はっきりとした委員長裁断で確認というふうには、私も申し上げませんが、ということではないかと思うのです。その点をもう一度強調をさせていただきたいというふうに思っております。

(中沢委員)

お願いします。

望月から提案されたことで、6点に絞られて説明があった中で、5番目の学校を支える地域の体制、地域プラットフォームということでありました。特に、学びの共同体ということで、本当に小学校から高校まで地域をあげて、授業改善に取り組んで、そして、どの生徒も自由に参加できる、そういったものを、今、目指しながら、実際に実践的に進めているという。この発想は非常に、多部制・単位制につながっていく大事な要素かなということを思います。

ということは、特に多部制・単位制に来る生徒の多くの中には、そういった授業の改善をしていかないと、実際、授業に参加できないという生徒も実際ある。というのは、例えば、小学校の時代から不登校傾向があって、いろいろな学力差がある、そういった生徒にも対応できなければ、やはりこういった授業改善というものが、基本的に大事であろうと。そういうことを、今、まさに望月地域では進めているということは、多部制・単位制の趣旨に非常にあっている、ひとつの大事な要素があると思いました。

もうひとつは交通の利便性について、今、市川委員さんのほうから、ご意見がでましたが、確かに客観的に見てそれほどいいとはいえない。鉄道がないということにおいて、非常に問題かなとは思いますが、それに対して、バスとかあるいはバイク利用というようなことで対応できるのではないかと、地理的においても、この第2通学区の中では、ほぼ真ん中、「扇の要」という表現を使いましたが、実際問題、やはり鉄道がないということに対して不便さは、いなめないということは思います。

私が先ほど、説明があった後、山村留学的なものを考えているということについては、具体的にどうなのかということをお聞きしましたが、ここが、私はひとつの望月らしさが出てくる面ではないかなと思っています。おそらく全国的に見ても、交通のいいところにおくというのは、確かに集まりやすいというのは事実です。しかし逆に、長野県の交通の不便さということを考えたときに、こういった山村留学的な要素を踏まえて、長野県各地から、あるいはもっと広くいえば、全国からこういった山村留学的な要素を設けながら、生徒を募集していくというのも、むしろひとつの長野県らしさにつながっていくものかなということだと思います。ただ、そういった地盤がしっかりできていないと、これはまさに、ただ理想的なことをいうだけで、だめかなということをおっしゃるわけです。

もうひとつの課題は、蓼科高校との関連なのです。これが、長い目で見たときに、どうなるのかなと。望月は多部制・単位制として、仮に存続した場合に、その近くにある蓼科高校との関連。蓼科高校は全日制普通科として、続いていくであろうということなのですが、その共存関係がどうなるのかなというのが、その辺がひとつの課題であって、主にこれは、もし仮に望月が単位制になっても、また続かなければいけないであろうし、また、片や蓼科高校も全日制として続かなければいけないであろうし、それが変に対抗的になって共倒れということになったら、かえっていけないことになる。その辺の読みが、見えない部分もあります。以上です。

（飯島委員長）

はい。ありがとうございます。だいぶ核心的な部分のご意見をいただきました。このまま休憩なしで続けてもいいのですが、やはり1時間半たちました。それで、10分ほど休憩を入れたいと思います。

【休憩後再開】

（飯島委員長）

それでは、休憩時間10分経過いたしました。委員会を再開させていただきます。よろしくお願いいたします。

休憩前にご意見がふたつございました。原委員からの問題点の克服、また今までホームルーム制がなかったものを望月高校は取り入れていく。いろいろな、今までなかった、多部制のいい点の提案のご発言がございました。良い点は、望月高校でなくてもできる点が、あるかと思います。ただ農村留学という形になると、やはりその地域性というのも、また出てくるのではないかとそんなことも思います。

それから、一番大事なところは、交通の利便性の所だろうと思うのです。それは私も、両校の対案をお聞きしておりますと、望月さんのほうは、扇の要、バス等がある、鉄道はないけれども、扇の要の地域的なものがある。地図上は扇の要の所にあるわけですが、果たして交通の利便性が確保できるのかどうかということが、非常に大きな問題であると思いますし、反対に野沢南高校さんは、もっと便利がいい上田や松本へという意見を片方では出しておりました。

そしてもう1点は、私たちが原委員もおっしゃっていましたように、定時制いわゆる夜間の皆さんをどう受け入れていくか、それも大事なことだと思います。県教委のたたき台である提案は、多部制・単位制のところの学校は、三部制にして夜間を受ける、そして、今ある小諸商業のところは、そのまま残すということでもありますから、上田方面は別として、そうしますと定時制の問題、果たして望月高校になった場合には、その辺をどうするのかということも含めまして、また、休憩前には中沢委員から、共存共栄の話も出ていたように思います。ひとつその辺のところどうしていったらいいのか、ご意見をいただきたいと思います。

(西村委員)

前半でも、私コメントいたしましたが、今回ふたつのことで考えています。1点目は先ほどいいましたように、「長野県らしい多部制・単位制」とはなんぞやということです。それは、本日話題として出ていますように、望月からの提案では二部制であること、ホームルームの考え方、山村留学等々です。それぞれいい意見です。でも私はずっと思っているんですが、やはり「長野県らしい多部制・単位制」はプラス志向というか、こんな学校にしたいという色々アイデアを出した前向きな多部制・単位制をつくるべきであると思います。変わるいいチャンスと思っています。

それが進学対応型なのか、何かということはそれぞれの学校で、考えていくべきですが、単純に不登校、それから引きこもり対応ということでの生徒を集めるだけではなくて前向きに、こういった学校をつくっていくという多部制・単位制を、ぜひ、私は長野県でつくっていく、これが「長野県らしい多部制・単位制」ではないかなと、私自身は思います。そうすると何が一番必要かということ、やはり交通の利便性だと思います。その点で、今、提案されていることは、それに対応できるのかどうか、私はその辺でひとつの結論が、出ているのではないかなと思っています。

2点目は、先ほど中沢委員がおっしゃいましたが、もし望月高校がそういった形で存続した場合には、近くにある学校の蓼科との問題はどうか。ひとつの大きなポイントではないかなと思います。ということで、利便性をどう考えるかということ、それから蓼科高校との問題をどうするのか、これがひとつの解決する糸口ではないかなと私は思っています。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございます。一番大変な結論を導くうえで、果たさなければいけないポイントだろうと思います。望月高校が多部制・単位制を設置する方向にした場合に、蓼科高校との関係をどうするのか、この辺のところをどうぞ、ほかの委員の皆さんご意見をください。

(佐藤副委員長)

実は、私は今まで発言ができなかったひとつの理由といたしまして、私は実は望月高校出身です。私の隣の隣にいられる遠山さんも私の後輩でして、そういう中で、非常に今遡上に上っている中で発言ができない、こういう話が上ってくることに対して、非常に切ないわけで、今まで聞いていたわけです。

私は前々から、高校改革というのは、今、ともすればターゲットに上がった高校の名称、そこを中心に話が進んでいて、ほかは、まるっきり何もないというような状況の中で、進んでいるのではないかと思うのですが。以前私は改革というのはやはり全校が対象ですよという話をしたと思うのですが。

そういう中で、今、例えば望月と蓼科の話が持ち上がっているわけですが、最初の県の提案ですと、これは統合ですよという話だったのですね。統合であるという案が、今の状態では蓼科は残って、望月がなくなってしまう、ゼロになってしまうというような中での、話になっているわけです。私は統合することによって、やはりあの地区に非常に強力な、

パワーアップされた高校ができるのではないかと考えるならば、例えば高校名など変えて、新しい学校をつくる、統合した学校をつくるんだとこういう中で、話を展開していかないとだめだと思います。

そういう中で、望月も先ほどの多部制・単位制の話を聞いて非常に感銘を受けて、いい案だなというふうに、実は、聞いておりました。そういう中で私は、統合した形で、その中にこの制度を入れていく、そして蓼科高校と望月が、統合した形で、成果をあげていくというようなことを、弾力的に考えていって、なんとか話ができないかと、いうふうに実は考えておりました。

それから、もうひとつ忘れてはならないことは、各委員が非常に窮屈な発言をされているひとつの原因は、これは県教委のほうから、私たちはこの推進会議を始めるときに、検討委員会の最終報告、これに沿って、この2通では2校減が一応たたき台ですよ、という中で話がされてきたわけです。そういう中で例えば、望月に多部制・単位制ができた場合に、そうすれば、あとどこを対象に学校を、考えたらいいだろうかという問題が出てきます。みんな素晴らしいから、全部いいですよというわけにはいかないわけです。そういう中で、そういうのは、絶えず念頭にありながら、なおかつ今どうしていくのかという話をしているわけです。それで、いい制度であれば、みんなすぐにいいといえば、非常に楽なわけですが、そういう縛りの中である程度、話を進めなかったら推進委員会も意味がないと思うのです。

私は野沢南が今、多部制・単位制に一応名指しされているわけですが、これも、前回も、私は申し上げましたけれども、今までの多部制・単位制というのは、みんなマイナスのイメージですよ。定時制を全部そこに集めてしまうと、あるいは、学校へ行けないような生徒を集めるなど、そういう非常にマイナスのイメージであるわけですので、それならば野沢南にとってみれば、進学率も高い、それから受験倍率もあるという学校で、改革することによってマイナスになったら、たまったものではないという話があると思うのです。

そういう中で、私は、前回も主張したのは、進学対応型の導入はできないか。そのためにはやはり、定時制をそこに全部集めて、なおかつ進学対応というのは無理があると思うのです。ですから、純然たる進学対応型に近い、長野県独自の多部制・単位制を、これから考えていくわけですが、そういう中で、長野県独自の多部制・単位制を野沢南に導入すると。それは、進学対応型に近い、つまり、今の学校よりも、改革することによって、魅力のある学校になったと、いう形にしなければいけないわけですから。

それで、定時制の問題ですが、これは先ほど原委員のほうから話がございましたが、やはり本来1カ所に集めてやると、というのは無理があるのです。県教委案では小諸商業が残るわけです。それから私は、上田と千曲ですか。これも、勝手な話ですが、坂城にできればそこに、吸収というか行けると。野沢南に関しても、その辺がどうするかわかりませんが、進学対応型を念頭に入れた多部制・単位制の中に、何かいい形で残れないかと、そのような形で構想していかないと、ただ、いい制度があるから全校残せと、いうことだったら非常に楽な話ですが、そうじゃないということはいつも念頭に、なければいけないと思うのです。そういうことで、私は望月の場合に関しては、本当に切ない話ですが、実際に切ない話ではなくて、統合して良い形のものに望月のその案を、入れながら、発展していく方向になればと、いうふうに考えている次第です。以上です。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございます。両校にわたっての話をいただきました。しかも、佐藤委員は望月高校の卒業生ということであることに、私たちも非常に重く、なんともいえない気持ちで提案を聞かせていただきました。

望月高校のいい意味での存続を願って、蓼科高校といい合併をしていく、そういうご提案も含めていただきました。なお、それに関しまして、多部制・単位制に関しましては、前回委員の皆さんから、どうも多部制・単位制はマイナス思考の意見ばかり出るけれども、プラス思考の学校にするようにという形で、この2通にはつくってこういう形の、ご検討をいただいたわけですが、よりそれをプラス思考で、いい学校をつくるのだ。そういう形で野沢南をしていくのだ。と、というような話をいただきました。大変、重いご意見をいただいたわけですが、委員の皆さん、ほかにご意見どうでしょうか。両方一緒というのは、難しいかと思いますがどうでしょう。

(中沢委員)

今、あちらこちらで多部制・単位制高校がマイナスイメージと、ということがいわれているのですが、ちょっと見方を変えると必ずしもそうではないという気がするんです。いろんな生徒を通わせて、中には不登校傾向の子も確かに、多部制・単位制へ行っているという実績はあります。そういう生徒側から見ればマイナスイメージではないのです。今までそういった学校がなかったのだけれど、今度自分も行けるのだと、そういうことから考えれば決してマイナスイメージではない。

それから、いろいろ、けいこ事だとかそういうことをやって、単位制ならばいいのだけれども、普通の全日制は厳しいという、そういった生徒から見ても、こういった多部制・単位制は、決してマイナスイメージではないです。

そういったことを考えた場合には、私は多部制・単位制は必ずしもマイナスイメージではないと思っています。確かに、進学コースのようなものを設定されていれば、なおそれは、さらにそういった対応性が、広がってそれなりにいいとは思っています。しかし今、現在あるものでも私は、決してそれほどマイナスイメージではないと、いうことはと思っています。一応それできります。

(飯島委員長)

大事なことだと思います。私たちは、つい不登校とかそういう子たちは、いけないのだというそういう観点から見るから、マイナスイメージなのですが、その子たちも学ぶ場所があれば、ちゃんと巣立つ子どもたちと、いうことを理解しなければならないと思います。そういう意味では、大変ありがたいご意見だったと思います。

(小林委員)

前から何度も申し上げて参りましたが、多部制・単位制それぞれの意味があって職業科ではなく、いわゆる普通科ということになっているわけですね。その時に、総合学制的な要素も取り入れてほしいと思います。学校の立地条件、そのほかによっても、違うかと思えますけれども、例えば、福祉コース、それから商業、国際課程的なものとか、情報科な

ど、その子が学べる場がほしいなと、前々から思っております。

それから、体を動かして学ぶというのも大事だというならば、スポーツ体育的なもの、農山村留学の関係となれば、農地なども必要と思う。何か少し幅の広いものを、子どもたちが学んでいく、それを学校独自ではなくて地域との連携の中でも、できていくのではないかなと思っております。

中には、勉強に疲れて、あるいは友達と話をし、心のゆったりする場というようなもの、あるいは畑でちょっと体を動かすことができるような場、子どもたちがそこに入るとほっとする、そういうものを含めた場ということで、施設整備などもうかがっているのです。そういう子どもに対応できるような場、それに子どもがひかれ、魅力を感じてくる子どもたちが、出てくるのではないかなということ。それが1点。

それから、単位制になると、好きな単位、楽な単位だけとる、ということが先ほど発表でございましたが、それは教育課程の場で、手段はいくらでもできると思います。それで、だめだとなればある程度、「こういうふうにしなさい、こういう単位を取りなさい」と、というような必須科目、選択科目で出来てくるから、それは心配はないのではないかなと思っております。

それから、先ほど、原委員からあまり大勢でなくもいいではないかという話がありましたが、群馬の太田フレックス高校でも10人ぐらいということでした。実際に見た各受業も、10人以内で授業をやっている場合があります。

それから松本筑摩へ行ったときも、10人ぐらいめどで授業の講座を、つくっているということでありました。予想よりは少ない人数で、先生とふれあいながら授業ができていくような気がします。以上です。

（飯島委員長）

はい。ありがとうございます。どうでしょうか。佐藤委員からの提案を重く受け止めて、望月の多部制・単位制をどうするのか、受け入れていくのか、そうではなくて、佐藤委員からも出たように、そういった提案を含めながら、多部制・単位制ではなくて、良い点を取りいれながら蓼科高校と統合するような形で、より良い学校をつくるように支援していく方向でどうだろうか、この辺方向づけにご意見がもしありましたら、いただきたいと思います。

（原 委員）

佐藤委員さんから、大変つらいお立場でのご意見がありました。そのほかの委員さんのご発言にもかかわるのですが、やむを得ないこととはいえ、現在の長野県の高校数をいくつか減らすとか、あるいはこの地域においては2校減らすとか、そういう方向が打ち出されて、しかも校名も出されてということで、それが重くのしかかっている、そういう枠組みの中で話をせざるを得ないということは、確かにやむを得ないことなわけですけれども、それにしても、私は、そこでちょっと待ってほしいという気持ちがあるのです。

つまり、2校減は、望月と蓼科という形で出ています。そうすると、どなたかの話にありましたが、言葉尻を取り上げて、どうこういうという意図ではありませんから、ご理解いただきたいのですが、望月が存続したら蓼科がどうなるかと、こういう議論がなされて

いました。そうすると、これこそ前提に沿ってしまうわけで、これであるとする望月は存続できなくなってしまうわけです。望月は、先ほど、縷々（るる）ご説明があったように、名前が挙がったその前からというふうに、私は伺っていますけれども、学校転換ということを考えていた。しかし、それもだめで、名前が挙がっているのも、それもひとつの既定の路線というふうに考えてしまうと、もう議論の余地がなくなってしまうと思うのです。

やはりその意味ではこの2校減ということも含めて、非常に重たい枠組みがかかっているのですが、しかしこれはたたき台というふうに、いったん押さえて、もう少し自由な議論をするということが、必要に思うわけです。それが前提であります。

そして、多部制の問題についていくつか出ましたけれども、佐藤先生から出された、統廃合の中で、望月の対案の素晴らしい点を、取り入れていくというようなお考えもありましたが、具体的なイメージを描いてみるとどうなるか、つまり普通科の課程があって、そこに例えば午前部、午後部、が入ってくる。

これは、少し形は違いますが、現在の松本筑摩に大変似ているわけです。松本筑摩に、視察にいかれた委員さんもいらっしゃると思いますが、私たちが同僚から聞いている限り、そういう仕組みの場合、学校運営が非常に大変であると。卑近な例を一例だけ挙げますが、昼間定時制の生徒がいて、一方で全日制の生徒がいて、例えば校舎から外に出ていると、指導しようとしてもどちらかよくわからないということは、現にあるわけです。もちろん、工夫すればというご意見は当然出てくるでしょうけれども、全日制課程と昼間定時制課程というのが同居している場合には、必然的に出てくる学校運営上のひとつの大きな困難になるのです。そういうことなどをイメージしてみると、なかなかそういう形で収まりが、ついていかないのではないかという感じがいたします。

それから、2つ目は、多部制というシステムの中で、マイナス、マイナスだというのが先行していて、プラスのイメージ、そうおっしゃった部分についてはわかりますが、マイナスやプラスということではなくて、基本的にはどこの県においてもそうでしょうけれども、私たちが長野県のことを考えるときもそうですが、どういう生徒の要求に応えるのかということです。その場合に必ず出てくるのは、不登校であったり、あるいは学び直しであったり、そして午前は学びたい時間だとか、午後が学びたい時間だとかそういう生徒諸君がくるということは、そういうことは否定できないことです。多部制が、二部であれ三部であれ履習時間帯がある以上、それは当然なことです。同時にそういう生徒の要求、ニーズに応えていく側面と、新しい側面を打ち出したらどうかと、いうふうにご意見を伺っているわけです。例えばそれが進学対応という形はどうかというご意見もあったと思うのです。

つまり、そういう再チャレンジするという、ある種の特化した部分と、違うまた特化した多部制・単位制という議論が、出てきているというふうに思うのです。そのことは、特に、望月の案は説明されましたけれども、そういういわば特化した部分も取り込んでいるというふうに拝見をしましたが、これについての議論も、具体的にどこまでイメージできるかというのが、なかなか難しいところがあって、いくつかの特化した、もちろんコースではないのですが、特化した課程というものを考えていく上で、ひとつの素材になるのかと、いうことを考えながら伺っていました。以上です。

(佐藤副委員長)

私は多部制に関しては太田フレックスもそうですし、いろいろな資料も読んでみまして、多部制・単位制ということに関しては、以前から申し上げましたが、ある程度この制度というのは、自分がしっかりしている、自我が確立している子どもに対してはメリットある制度だと思います。ですが自我が確立していない、正直いって、これからどうしたらいいとか、不登校とか、そういう学生に取り入れる制度には、はっきり申し上げて無理です。これは自分の行き先がわからない学生に、自分で好き勝手に単位を取って、卒業すればいいよという背景の中では、いくらホームルームをつくって指導はしますよといっても、基本は、単位を好き勝手に好きな時間に、取って卒業できる制度なのです。一番イメージできるのは、私どもが大学にいったときがそうです。単位を取って卒業する。大学を卒業するときようやく友達ができたのは卒業研究のときと、いうぐらいの形だと思うのです。もちろんサークルなどに入れば別でけれども。それが自我が確立していない生徒に、その制度を導入すること自身が、非常に難しい制度です。

ですから、2通ではこれはプラスに出る場合は、つまり自我が確立して、自分の進路などがはっきり見定められる生徒には、適するもので、私は進学対応型の制度の導入が適当だと思います。午前中は弱いから午後の授業を受けますなどという、たぐいの生徒の対応としては無理があると思います。以前太田委員だったか利便性のいい、上田の駅前辺りの所につくって、それで、対応したらどうかという話ができましたけれども、そういうかたちのものだと思います。

太田フレックスの視察についてテレビでご覧になったと思いますが、舞踊か何かをやっている女性がいまして。私はお稽古があるので、午前中は舞踊をしなければいけない、午後出てきて単位を取ります。これは、この女性ははっきりした自我が確立しているのです。ですから、非常にうまく使えるわけです。進学対応型もそうです。例えば、難関大学に行きたい場合に、早く単位を取って後は自分の専門の分野をもっと勉強する、そうしてこの制度は初めて有効に活用できるわけです。そういう中で、本来自我が確立していない生徒を対象には、私は無理な制度だとはっきり申し上げたいと思います。

そういう中で、2通では進学対応型を施行した、あるいはそれだけではなくて、もっと長野県らしい、制度をいろいろその中に入れて、なおかつ1校導入したらどうか。

(和泉委員)

ふたつあるのですが、最近本を読んだり話を聞いたりして、今日ここにも教育関係者の方もいっぱいいらっしゃるので、先ほど、中沢さんがいわれた案にたいして、決して一方的な話ではないと思うのですが、私のものの考え方は、これは、大事なものの考え方なのですが、「弱者には援助やサポートが必要である。敗者には、はっきりいってするな」。私の場合には、今の佐藤先生のお話と一緒に、要するに本来あるべき姿を失っていることについて、インフラなりをあんまりサポートするというのは、私はこれは敗者を救う。本来、朝きちんと起きて学校に行くとか、それが自我の確立だと思っているのです。だから、自我の確立があった子どもは、やっぱりそういう体制、多部制・単位制が成立すると思っている。

そういう意見の中で、今日は、私は結論出ませんが、今、望月の案の中で、小学校、

こちらのプラットフォームの中には保育園も含めて、要するに自我の確立が底辺の中で、救っていくという、この考え方はこれは具体的にやっていかなくてはいけない問題ですが、こういう答申が出たということは、長野県の魅力ある中で、まずひとつは、手を挙げてやりたいという意思表示をされたということと、ひとつのプランニングをされた。だからこれについては非常に評価すると。利便性と蓼科との関係をどうするかという部分もありますが、私は長野県の活性化の中では、古い学校があります、100年の学校もあります。しかし、手を挙げて、小学校、あるいは保育園、地域をまとめた教育の改革をやっていく学校ができてひとつの文化価値から今度、私は長野県の体制を変えてもいいと思うのです。私はそれがある意味ではポジティブかもしれない、前向きかもしれないのです。だから、それについては、今日の意見では聞きましたが、そういう再編案もあると。

逆に私は設定変更をすることは、敗者に対して手を差し伸べているので、これについては一定の設備、メンテ等が必要ですが、これを過大視していく部分については私は、やはり教育上も良くないと。本来あるべきところでがんばって、むしろ本来あるべきところで努力すると。それを失って、ある面では指導、ある面ではそれを教育が並行していくというやり方は、私は国際社会を生きていく日本人としては、私はまず負けると思います。

ある人の話だと、「人は生きる時代を選べない」というお話がありましたが、その時代に生きて、そしてそれを乗り越えていくことこそ、初めて生きるということであるし、そういう人材を必要とするので、それが生きられないなら、昔に戻る。それはできないわけです。現実としてそれを受け止めて、乗り越えていくというものの考え方は、私は底辺には絶対に必要であって、それは弱者、例えば体が不自由な方、それには合わせる、援助をしなければならぬ。ですから敗者と援助を時々勘違いされているのでは、ないかないという気がする。その中で今、望月の話では、小学校から自我をつくっていく、ひとつの絵を見て独立するという意見について立派な考え方だと思います。私は長野県でこういうモデルができたって、逆に、私は統廃合されちゃったほうがある面では、そういう危機感があると思います。

そういうところが、「他山の石」みたいな形で、おれたちは歴史があって、普通高校だからと思っているところに、ちょっとやっぱこの論理が、生徒数が減っているというところは、やり玉に挙がるというのはちょっと語弊があるのですが、そういう危機感というか、要するに、教育委員会としてどういうインフラをつくって、どういうサポートをして、地域がどうしていく、そういう学校でないと生き残れないという考え方が、長野県に定着すると、魅力ある学校になるのではないかなと思うので、今日、私は望月の案については、感想としては成功してほしいなという部分が、要するに遠いからという話ではなく、ただ、今日の時点ではまだ全部を聞いていないので、まだ自分の考えもまとまっていません。どうするということは、まだ宿題が残っていますから言いませんが、ひとつは評価の価値だと認識しています。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございました。

(原 委員)

ちょっとすみません。

和泉さんに、ちょっと質問なのですが、望月の評価のことはこれから議論があると思います。前段階で言われた、「弱者へはサポートで、敗者へは冷たく」というふうに聞こえましたが、例えば、中学から高校に入る 15 歳の段階で、「弱者と敗者」というのはどのようなお考えでしょうか。

(和泉委員)

私が言っているのは、スポーツ話ですから、勝った、負けたというスポーツの話において、要するに負けた側に、「あんた頑張ったね」と言って、慰めてもなにもならないと。要するに、次、勝つためにはどうするかという話であって、人生の話はとやかく言わない。人生は、その人がひとり歩いてきているその時の話だと思うので、今、私がいっているのは、スポーツの話として言っています。

(飯島委員長)

はい。それはここで終わりにしていただきたいと思います。

望月高校の話が、今だいぶ出てきております。大変にいいご提案であります。ただ、それを多部制・単位制を取り入れて統合するというだけでなく、普通学科どうしが統合して、その良さを取り入れていくと、いう考えで佐藤委員はお話したようにいったように、私は受け取っています。当然、多部制・単位制の中で提案された良い点は取り入れたいと、そういうふうな委員さんの苦渋のご提案だったというような気がいたします。その辺のところを、もう少しご意見いただければありがたいと思います。

(佐藤副委員長)

これは県教委のお話ではないかと思いますが、合併という場合に、今の、全体のイメージの中では、ひとつの学校が生き残って、ひとつの学校がつぶれてしまうというようなイメージがあるわけです。ですから至る所で危機感があって、いろいろ話が出るわけですが、これが統合させるという中で、これはかなり県教委のほうでリーダーシップを発揮していただいて、早くいえば対象校をシャッフルしてしまっ、極めていいもの新しくをつくったという形のものにできないか、ひとつの学校が生き残ったというイメージが、払拭（ふっしょく）できるような手だてが何かできないかと、いうことをお願いしておきたいと思うのです。場合によっては、今回の会合があつてどうなるか、これは遠山委員がいらっしゃるのになんですが、そのぐらいのところまで思い切って、統合という形のを打ち出してもらえば、また考え方も違ってくるのではないかなと思います。以上です。

(飯島委員長)

はい。答えはいらないんですね。

(中沢委員)

私も、さっき望月高校が多部制・単位制になった場合に蓼科との関係が、どうなるのかなという、そういう心配の意見をいったのですけれども、全くこれは性格が違う学校なのです。多部制・単位制が望月になった場合です。

だから、蓼科高校の特色を本当により明確にし、また望月高校が多部制・単位制になった場合は、もちろん長野県らしい多部制・単位制というものを特徴づけて、よほどその内容を、はっきりしたイメージをもって特色をもってやっていくということが、当然必要になるだろうということは思うのです。そうしないと、何かあいまいなままで、いってしまふと返って危険性が、あるということを思ったことなのです。

それで、先ほど望月のほうからの具体的な提案があって、これは素晴らしいということは私も思いました。その地域プラットホーム、この発想をこのまま、例えば統合して、蓼科と望月が統合した方向でも、生かしていけばいいのではないかと、そういう発想もありますけれども、今、望月だからこそ、望月だという地域性だからこそ、これが出てきたと思うのです。そこを受け止めなければいけないかなと。統合されていったときに果たしてこれが、このままつながっていくかどうかということは、ちょっと私は疑問に思う点です。望月地区の、まさに保育園、小学校、中学校が、そのまま高校まで含めたひとつの母体となって、出来ているこの学びの共同体、そのところは大事に受け止めなければいけないかなと思っています。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございます。ほかにご意見どうでしょう。

(西村委員)

何度も佐藤委員のほうから、お立場上なかなかいいにくいところでありながら、貴重な意見をいつていただきました。私は佐藤委員に敬服いたしました。私自身も蓼科、望月の統合には賛成です。「統合」なのですよ、無くなるではなく、新しい学校をつくるのです。そういうイメージで、みんなが考えていけば、いろんな知恵が集まってくると思います。それが、蓼科が導入しているコース制でもあるし、望月が導入している地域プラットホームでもあるし、そういったことを積極的に導入し、学校づくりと一緒にやっていくこと、それが新しい魅力ある学校づくりだと思っていますので、私は、佐藤さんの考え方に感動しました。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございます。前向きに望月と蓼科を合併の方向でより良い学校をつかっていったらと、いうご意見が続いております。非常に、苦しいご判断をいただいているのではないかと思いますけれども、いかがでしょうか。もう2、3ご意見をいただければと思います。

(市川委員)

よろしくお願いします。

同様な意見なわけですが、教育学の権威の佐藤学先生をお招きして、教育プラットフォームを進めている望月地域。これに関して、しかもこれは多部制を念頭におかれてのことも、考えていらっしゃるからだと思います。

そうすると例えば、太田フレックスでは、先生1人に対して10人の生徒であり、また、静岡中央では先生1人に対して12人という、この中で行われている。つまり、ひとり一人が、この単位をとってキャリアをどこに進めていくかと、いうキャリア教育をしていくにあたっては、生徒の数が少ないことが最前提であります。この点につきまして、今回は、少子高齢化の問題と併せて浮かんできたことが、非常に残念な点であるのですが、実はこれは本来教育の立場として、中等教育の中心中核をやるものとして、教育改革の骨格をなすものではないかなと私は思います。

仮にこれが、進学校と呼ばれているところで行われた場合、大変な先生方の増員と施設の改善をして対応しなければ、ひとり一人の学びに対応することができません。この地域の中で、生徒と先生方がいた中で、生徒の数が少ない教室の中で、生まれてきた発想だと思っています。仮にこれが進学校で行われた場合、非常に学力ギャップは、計り知れないものだと思います。これに対しまして、地域で行われたこと関しまして、ひとり一人の学びのカルテが出来上がり、それに合わせた教育、キャリア教育がなされるのであれば、大きな成果をあげるのではないかと思います。

それに対しまして、これは地域を、近隣を合わせて、本当に地域の特色的なものでなくて、近隣に合わせてどんどん進められるべきものだと思います。たぶん、これらのことが広まれば、ほかの地域でも、より取り入れていきたいというような声も広がるというように、私は成果をあげるのではないかと。私は対応していきたいと思いますので、近隣を巻き込むというそういう力になるものを期待しております。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございます。ほかにご意見どうでしょうか。大変繰り返すようで、すみませんけども、重いご意見をそれぞれの委員さんからいただいて、また、今日は、望月高校の皆さんの提案もいただきました。

その結果から、このような形の議論に推移してきております。ここで提案申し上げますけれども、望月高校と蓼科高校をいい意味で統合するという形で、よりいい学校を構築していくという形で、委員会としては考えていきたいと思うのですけれども、いかがでしょうか。

(荻原委員)

委員長のご提案ではございますが、望月高校では皆さん、多部制・単位制ということで一部は改革しながらということを行っています。蓼科高校については細かくいいませんが、この委員会に幾つかの統合という格好で、そういうご提案が出されたわけで、そこがもうひと勝負しなければならないと私は思います。

地域にどのような形で、高校が存在しているか、地域の中学にとっても不安だろうし、

そういう意味では、佐藤さんがいったのは、それを統合して、そういう活動の多部制・単位制でうまくいくのかなという気もしたのですが、そこは、望月の提案をどうするかということも、含めてもう少し深めていかなければ、ちょっと結論というのは、最初に統一ありきだと、まずいのではないかと私は思っています。

（飯島委員長）

それについていかがですか。

（原 委員）

関連しますが、こういう議論で今きているわけです。望月が対案をお話しになって、それについていろいろ議論してきました。それで、多くの方々の意見は、望月の多部制案を非常に高く評価していると、いうふうに私は受け止めました。にもかかわらず、それがなんで統合になるのか、議論が違うでしょう。多部制問題をもうちょっと議論しませんか。それは、佐藤委員さんが卒業生として苦しいお立場から、そういうのを取り入れたこともあり得るねというご意見はありました。しかし、多部制問題をここにおいて、それを簡単に組み込んで、2校を統合すればという意見には、まだなっていないです。まだ、学校の統廃合問題にまでは、全体の委員会の議論がっていないと思います。対案が提案された場所のことを巡っての議論で、推移したというふうに理解しますので、そういう取り計らいをお願いしたいと思います。

（飯島委員長）

はい。十分それぞれの、皆さんのご意見は理解しているつもりであります。ただ、私たちが、与えられた決定事項に対しまして、ややもすると、この辺のところでは一緒に話をしてもいいのかなということで、あえて提案をさせていただいたわけであります。その辺はご理解いただきたいと思います。

多部制・単位制、これは望月高校から立候補という型で対案を出していただきました。それをそのままわれわれが受け入れるのか、受け入れないのか。受け入れた場合はどうなるのか、受け入れられないならどうするのかという話から、ややもすると、その辺のところの意見にくるのかなということで提案をさせていただいたわけです。

まだ、議論が足りないということであれば、どうぞ意見を出していただいて、私たち推進委員会が設置された、要項にそって私達はどういう結論を、出していくのかということで、ご討議いただきたいと思います。

（佐藤副委員長）

私は、蓼科高校普通科に望月が統合、というよりも、多部制・単位制を併設した形で新しい学校をというような発言ではない。普通高校と普通高校で、強力な学校をつくったらどうかという発言です。その中で、望月で今日提案していただいた、望月教育プラットフォーム、これも非常にいい案なのでこれを、やはり、高校をこれから充実していくためには、地域にしっかり根付いて、なおかつ幼稚園時代からその学校を愛するような、その学校に行きたくするような教育、そういうものをこの望月教育プラットフォームのアイデアを、

その中に入れていったらどうかということで、私は即、多部制・単位制と普通科を合併するという話は、私の気持ちではしておりません。

毎年毎年、ニートに相当する人間が出てきてしまうのです。それは、さっき、和泉委員が申し述べられましたように、どこかで「教育というのは、教育しなければいけない」のです。しつけをちゃんとつけなければいけないのです。だから、私は、午前中は弱いから、午後行きますという、そういう教育に対応すること自身が、非常に恥ずかしいことです。ただ、それでも現状は、見なくてははいけない。実際に、そういう学生がいるわけです。そういう子に対応する制度も必要であろうと、ただ、それは、あくまでも仮処方的です。もっと基本的な教育はどう有るべきかと、いうことをきちんとやらなければいけないと思います。ですから、私は多部制・単位制とくっつけるという話ではないです。

（飯島委員長）

そうですね。一緒になるなら、両方の普通高校を統合して魅力ある、より強力な高校をつくらうということであります。ですから、私が提案した内容と同じでよろしいかなと思うのです。ただ、その提案が早かったということでありますので、また皆さんのほうからご意見をください。

（小林委員）

お隣の佐藤委員さん、卒業生だという立場で、大変苦渋の発言だと思います。私も重く受け止めたいと思います。「望月がなくなって、蓼科が残る」というそういう考えではなくて、「望月と蓼科が一緒になって新たなものを生み出す」、こういう形に、しかも一緒になったときに、今、望月高校だけのお話を伺ったのですが、蓼科高校とすれば、どういうふうするかという、その中で新たなものが生み出されるのではないかと思います。

普通高校であります、どなたかがおっしゃった、コース制というようなものもあると思います。今の、ふたつの学校の良いところ、それを、それぞれに、しかも子どもたちのニーズに合った方法でつくりあげていく。多部制・単位制ですと、交通の利便性がちょっと、というご意見がだいぶ出ておりますけれど、私もそのように考えております。今の普通科を、そのまま合わせ、その中でコース制というもので、いいところを取り上げる。望月教育プラットホーム、これは評価をしたい。多部制・単位制ではなく、普通科でそういうことがのばしていけるのではないかと思います。

現在の望月高校、蓼科高校は、不登校傾向の子どもに、両方とも同じような感じで進学し、そこで立ち直る。この委員会の2回か3回の時に各高校の取り組みの資料にありましたが、両校とも似たようなことを頑張っているなど、というようなことを、私は前から思い、それが地域性なのか、それがなんなのかというようなことを思いました。最初の望月高校のご説明のときに、長野県らしさという中に、含めていただいたわけですが、そういうところも含めて両校とも、長野県らしさということで、伸びていただければと思っております。

(中沢委員)

望月高校、蓼科高校の全日制普通科を統合していこうという意見が、今出ていますけれども、多部制・単位制の設置校と、非常にこれは関係が深い話題だと思うのです。前回か、前々回に、多部制・単位制を、2通に設置していくのだという方向がもう出ていました。以前私もそれについて、いろいろ疑問はもっていたのですが、結局、この委員会では、多部制・単位制をこの2通には、おいていこうというそういう方向ができています。その今の話と、全日制普通科を統合していくというのは非常に関連が深い問題なので、それをもとに考えていかないと、この望月、蓼科の統合問題も、話が進んでいかないのではないかと思います。

仮に今、蓼科と望月の普通科を統合していくといった場合には、先ほどの望月から出された多部制・単位制の設置は、結局、望月高校には出来ないという発想になってきます。そうした場合には、どこにそれを持っていくのかということと、非常に関連のある問題ですから、その辺をもっと論議しないと、だめじゃないかなと思います。

(飯島委員長)

その辺のところは、いかがでしょうか。

(荻原委員)

確かにそのようにいわれると、ひとつの学校を挙げると、こっちの学校がはじかれると。そっちの高校がはじかれると、例えば望月と蓼科が一緒になるから、当然もう一校挙がっている野沢南校は、多部制・単位制の候補として挙がってきているわけです。だから、そういう意味では、その提案にはないですが、われわれ、なかなか具体的な名前は出しづらいというのがあるし、望月さんとしては、やはりここで立候補して存続をかけた。それを、皆さんが重く受け止めるということで議論されたわけですが、その多部制・単位制と普通科の併設が難しいのだということで、では普通科と普通科の統合。それで同じような進学、社会教育や、福祉とか、教育特色のある望月と蓼科により、レベルアップした新設高校として、やっていくことはひとつの方法だと思います。

ただそこへ、今度、先ほど中沢さんがいったように、多部制・単位制をひとつの命題としてどうするのかということで、大変関連性がありすぎて、ひとつの方法を選択すればこっちがはじかれるというような格好で、あまり関連しすぎるのも私は、相当むずかしいのではないかと思います。

だから、先ほどから、普通高校同士もいいのではないかと、いう議論はされてきましたが、私は納得できる議論で、それが具体的な新設校として保証ができるのかと、いうことをしっかりすれば、望月さんもなんとか納得できるのかなと。ただ、そこを新しい高校としてどうやって、われわれが校名を挙げて保証できていくのかなというのは、私のずっと一番の気掛かりなところです。

(飯島委員長)

はい。それぞれの委員さんのご心配、ごもっともだろうと思います。ただ、今日多部制・単位制の、それぞれ望月さん、野沢南さんから提案説明を受けてきて、多部制・単位制の議論を進めていったわけであります。けれどもその中から、私たちが所掌事項として与えられている、総数の決定基準に基づく、再編案にも関係するものですから、私たちはそれも検討しなければいけないわけです。ですから、それに対して、多部制・単位制の議論を進めるのだけれども、こちらに当てはまる事項にも関わってきたから、そちらのほうへ多少皆さんの考えを、修復をお願いしたいということであります。

ですからその辺のところを十分ご理解いただいて、かといって多部制・単位制を粗末に扱うということではなくて、お考えいただければと思います。別にここで今日結論を出すとか、そういう意味ではございません。ご意見いただければありがたいです。ゆくゆく、私たちが議論しなければいけない論点でありますから、お願いいたします。

(西村委員)

議論の進め方は、委員長案私は賛成です。やはりいろいろなことを修復していきますと、やはり、ひとつひとつ物事は解決していかなければいけないと思っておりますので、今の委員長のやり方で私は賛成です。

(芹澤委員)

議論を整理する必要があると思っています。それは今日は望月高校の多部制・単位制の提案に対して、この委員会としてどう考えるかという結論を得た上で、それを終えた上で、その後、望月と蓼科をシャッフルできるかどうかということも必要なものを方法としての、一本化が可能かどうか。改めて多部制・単位制をどこにおくかという議論を3つに分けなくてはいいのではないかと思います。

従って、今日結論が出ないとしても、今日の望月、私、ちょっと遅れてまことに申し訳ありません。聞いておりませんでした。野沢南の説明、特に望月の皆さんのこと結論を出した上で、シャッフルや望月と蓼科を考えていくと、この論理を得ていかないとまとまらないのではないかと。いきなり一緒にする、多部制・単位制ではどうなるのかというところの議論で、ちょっと混乱があるかなと思っております。以上です。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございます。対案事項でご説明いただきましたが、私たちは十分それを参考にしながら、新たな議論を、展開をしていくのが大事だと思っております。そこで、今の芹澤委員のように、望月の対案はいいか悪いかという結論を出すというのはなかなか難しいことだと思います。それから、野沢南から出ているものに対しても、それがいいとか悪いとかをここで今結論を出すのは非常に難しい事だと思っております。

そんなところから、繰り返すようですが、議論の中から、統廃合の問題にもふれられたものですから、あえて話をそちらのほうへ進めたわけであります。もし今日それぞれの2校からの対案。受け入れるとか、受け入れないとかの問題ではなくて、われわれの討議の中に、十分生かす形で、これからも進めてはいきたいと、そうすべきだとは思っていま

すけれども、全体的にそっくり受け入れるということではないと、私は思っています。

ですから、その辺のところも、確認しなければならぬと思っております。受け入れるならばどうしようと、そこまで考えていかなければいけないと思います。

それから、今日は、時間的に難しくなってきましたから、結論という形には至らないと思えますけれども、交通の利便性、望月にした場合には定時制をどうするのか、それから、利便性に対しては、それは望月と野沢南の提案は、相反する利便性の考えに対してはどうするのか。望月さんは自分のところで、扇の要のところで十分というしておりますし、野沢南さんは野沢よりもっと利便性のいいところという提案でした。この辺のところを、私達委員がどういうふうに考えていくのか、そういうことで次回、統廃合も含めて、これもそろそろ、両方分けていくよりも、だぶって議論が進んでくるのだらうと思います。切り離してということがなかなか難しくなってくるかもしれません。

この辺は皆さんのご意見をいい意味で集約できるような議論になってくれればいいなというふうに思います。後5分ほどでありますけれども、もしこの委員会の中で、何かご発言することがあれば、どうぞいただきたいと思います。

(原 委員)

終わりに近づいていますので、簡単に申し上げたいと思います。今日、名前が挙がった2校から対案のお話があって非常に考えるところがたくさんありました。野沢南でおっしゃられていることについても、十分理解ができるというふうに思いました。望月については、いろいろな方々から、かなり評価をされる意見がありまして、同感するところが多いのですが、あえて、2、3またの機会に教えていただきたいと、いうふうに思いますが、私も先ほどいいましたが、単位制のみの学校に、学級、ホームルーム、こういったものを導入するという、そこにひとつの新しさを感じるのですが、実際にその運営の状況がどうなるのか、どうイメージアップされるのかということ、ぜひ課題にさせていただきたいと思います。

それから2つ目は、プラットホーム構想でありまして、もうすでに動いているわけですから、構想といっちはいけません、そのプラットホームという考え方もいわば、こういうふうないうこともできるでしょうか。つまり、いろいろな既成の組織がございます。合併しましたから、かつての町の教育委員会はございませんけれども、そういう行政上の組織、それから地域の区長会とかいろいろな組織があります。いわば、あえてそれを「官製の組織」というふうにいわせていただければ、それ以外の本当に地域からの、「民から」のプラットホームを支える、そういう仕組みと動き、こういったものはどうなるのかということも、課題にさせていただきたいというふうに思うものです。

とりあえず、2点を申し上げますが、そういうことによって長野県にふさわしい構想というのが、より具体的な姿をもって現れてくるのではないかと。先ほどの説明の最後に、長野県にふさわしいのは、利便性の問題ではなくて、教育の質だというお話がありましたので、ぜひそういう点でまた、新しく問題を提供していただきたいというふうに思います。

最後に、統廃合の問題と多部制・単位制の問題、当然関与してくるわけです。やがてその議論にいくわけですが、しかしそれにしても、関連はするけれども、関連と区別、区別をしつつ論ずる。それは、芹澤さんのおっしゃられた通りだと思います。以上です。

（飯島委員長）

はい。ありがとうございます。ほかに、今日ご意見、発言をしておかなければいけないという、委員さんいらっしゃいましたらどうぞ。

（小林委員）

今の原委員の発言に、質問ですが、「提供してほしい」というのは具体的にどういうことですか。今日みたいな場をつくるということですか、それとも資料を出しなさいということですか。その点ちょっとわからなかったものですからお願いします。

（原 委員）

私が今イメージを描いているのは、ペーパー資料でも十分だと思います。

（飯島委員長）

もしペーパー資料が出るようでしたら、委員会のほうへいただくということで、それは、事務局のほうで対応してください。よろしくお願いいたします。

ほかにございませんか。ありがとうございます。時間になりました。それでは、次回の日程等について事務局からお願いいたします。

（植松主任教育支援主事）

それでは、次回の日程につきましてご説明をいたします。次回は12月11日（日曜日）でございますが、午前中を現在候補に考えておりますのでよろしくお願いいたします。場所等につきましては、また決まり次第、皆さんのほうへ連絡をさせていただきたいと思えます。12月11日（日曜日）の午前中ということでお願いします。以上でございます。

（飯島委員長）

はい。ありがとうございます。よろしいでしょうか。また詳細につきましては、事務局のほうから連絡をするということでご理解いただきたいと思います。

それでは、以上をもちまして第12回の推進委員会議を終了させていただきます。ありがとうございました。